瑷（あい）

光耀抄 …… 2
琥珀集 …… 6
瑠璃集 …… 15
瑪瑙集 …… 26
紅玉集 …… 28
俳誌交歓 …… 29
4月号月評 …… 30
恵贈句集拝見（73） …… 32
恵贈俳誌拝見（39） …… 34
他誌転載 …… 36
特別作品「遷座遷宮の旅」 …… 38
琥珀集作品鑑賞 …… 40
瑠璃集作品鑑賞Ⅰ …… 41
瑠璃集作品鑑賞Ⅱ …… 42
瑪瑙集紅玉集作品鑑賞 …… 43
イザナミの言語学（4） …… 46
「湖北野鳥センター」吟行 …… 48
大和を歩く …… 50
琵琶湖俳句サロン …… 52
エッセイ「雪と和紙」 …… 53

2014/4　第97号

今月の一句

菩提樹の葉かげゆくべし大茶盛　桂樟蹊子

奈良の西大寺では四月第二土曜・日曜日に大茶盛が行われる。顔がすっぽり入る位の直径三十センチの大茶碗に、三十五センチもある茶筅で茶をたてる行事がある。その大茶盛の行われる光明殿へ行く本堂の角に、茶事にゆかりのある叡尊手植えの菩提樹がある。この句は師の第七番目の句碑として、元東大寺管長である狭川青史師はじめ霜林奈良句会の骨折りで昭和六十一年に西大寺に建てられた句碑の句である。昨日のことのように思い出される。

隆　子

PDF= 俳誌の salon

湖北野鳥センター

塩路隆子

湖風に雪さらさらと野をまろぶ

なぎさ辺の波に乗りたる浮寝鳥

引き支度整ふ鴨の羽艶かな

猛禽の和むひと刻寒日和

大鷲の挙動瞬時も見逃さじ

枯るる中黄を鮮やかに鷲の嘴

風格の大鷲の背を孤愁とも

PDF= 俳誌の salon

四月号光耀抄

塩路　隆子選

屋根よりの落雪響く朝の床　笠井　清佑
木偶戎めでたぎ春を独り舞　山口キミコ
天空に骨身をさらす冬木立　田中　浅子
春鹿の群を奔らすホルンの音　北尾　章郎
宿帳に滲む筆跡雪をんな　阪本　哲弘
稲荷山また時雨るるや一の午　宮崎左智子
ひらがなでだんご売る店日脚伸ぶ　伊東　和子
大根をべっこう色に煮てひとり　杉本　綾
間伐の杉ころがれる雪解川　坂上　香菜
春陽さす一等席は猫のもの　森下　康子
雪をんな雪ある山へ帰りけり　竹内　悦子
朝の道寒行僧を追うて布施　粟倉　昌子
雛飾る街道筋の京町家　飯田美千子
初午やみな右向きの焼すずめ　石川かおり
あかときの雪の伊吹嶺こがね色　井口　淳子
風呂吹きや六腑にしみるおもてなし　伊藤　憲子
たくましき漢瓦師寒風裡　大松　一枝
豪商や榾火明りに立志伝　片岡久美子
ナポレオンの生涯はしょる初歌劇　木戸　宏子

PDF= 俳誌の salon

焦点の定まらぬ闇豆を打つ　国包　澄子
大鷹の翼大きく餌を捉ふ　坂根　宏子
日と土の匂ひ新たや蕗の薹　塩路　五郎
細胞の初期化ここにも下萌ゆる　鈴木　照子
山里の炭火かぐはし牡丹鍋　松田　和子
塩引鮭越後の風にさらさるる　辻　香秀
雪しまく旧海軍の赤煉瓦　辻　知代子
寒月や湯畑の湯気昇りゆく　中井登喜子
幾千の鴨の屯や波しづか　中川すみ子
節分のお化け結ひ髪古都に遇ふ　中村ふく子
Ｉ・Ｔの世界と無縁海鼠喰ふ　西村　敏子
掃除機をルンバに変へて日向ぼこ　橋本　靖子
きらきらと流るる湖面春予感　松田　洋子
蝋梅やレトロ着物の蚤の市　宮田　香
飛梅を伝へて小さき天満宮　山田　愛子
実験の白割烹着春きざす　渡部　法子
氷爆が天使の梯子閉ぢ込める　黒住　康晴
日を返す比叡遥かに諸子釣　藤見佳楠子
白鳥の水掻く音や朝の靄　小澤　菜美
淡雪や天ほつれたるところから　常田　希望

PDF= 俳誌の salon

６Ｂの鉛筆で描く冬の峡　松岡　和子
たまものや冬季五輪の若き獅子　鷲見たえ子
世界中のチョコ顔合はす二月かな　横田　矩子
北海の身の締まりたるたらば蟹　高谷　栄一
鷺群るる高き梢に雨優し　谷口　俊郎
飛沫散る青き華厳の滝氷柱　中井　弘一
ガス灯は明治のなごり春の雪　伊藤　純子
水仙の伸びる背丈を指測り　伊藤　和子
舞妓らの稲穂かんざし初詣　稲田　和子
弁財天祀る山門紅つばき　伊庭　玲子
一湾の海穏やかや淑気満ち　大島みよし
苦労性の手はごつとしてあたたかし　大谷　信子
海苔粗朶へ梳き込む波のたぢろがず　落合　晃
雪合戦を語るばあちゃん武勇伝　大堀　賢二
大絵馬の駒に初風優しかり　桂　敦子
山催の足湯に和む梅日和　川崎　利子
家屋税払ふしあわせ年度末　河田　孝子
乗客ら凍るホームに吐き出され　小西　和子
「まだだよ」と蕾へ私語や春の雪　小林　久子
毛衣婦人に蹤きくる野犬月夜道　西郷　慶子

PDF= 俳誌の salon

辻地蔵の赤き前垂れ春を待つ　笹井　康夫
鍋あとの雑炊楽し旨き味　佐々木和子
底冷えの洛中一献蔵の酒　佐用　圭子
ざくざくと雪を踏みしめ夜の道　鈴木　江奈
晴天の賀茂に舞ひ継ぐ百合鴎　高屋喜美子
泉水のさざ波銀に冬日和　竹内喜代子
樹氷越え小芥子を削る音の里　津田　富司
粉雪や都会の朝に音はなく　土井久美子
野草活くる祖母の形見の桐火桶　十時　和子
しょりしょりと羅紗切る鋏四温晴　中本　吉信
「流浪の民」に盛り上がりたる芋煮会　能勢　栄子
初雪やテレビは今朝の金閣寺　難波　篤直
雪椿けなげに咲ける月明り　秦　和子
寒風にも寧らぐ心龍天井　平井　紀夫
夕おぼろ古都を見下ろすタワーの灯　福本すみ子
創作の海鼠腸珍味七人衆　藤本　秀機
寒明けや轍の跡のやはらかき　増田　一代
小夜更けて輝き増せり冬銀河　三川美代子
裸木に残る鳥の巣空青き　山崎　里美
撫で牛の鼻先光る梅日和　和田　郁子

琥珀集

朝の床　笠井　清佑

湯気立つる酒饅を売る古都の舗
咲けよ咲け日差の中の梅盆栽
久々の雪に来ぬバス戸惑ひぬ
山焼きの若草山を見はるかす
出勤の途中に詣で厄落し
屋根よりの落雪響く朝の床
四十年を愛づる盆栽春を待つ

淡路木偶　山口キミコ

冬波の昏きうねりや大鳴門
浄瑠璃に淡路木偶舞ふ初芝居
木偶戎めでたき春を独り舞
冬禽の一羽はみ出し見張り役
おほ船の行き交ふ明石冬の凪
海に向く斜面芳し水仙郷
玉葱小屋寒々として淡路の圃

冬　川　田中　淺子

逞しき千代の蘇鉄や淑気満ち
寄り添うて二つほころぶ福寿草
結界の影ひそかなり冬の蝶
冬川を借景として鷺一羽
天空に骨身をさらす冬木立
客去りてもとのひとりや冬座敷
春寒しビルの狭間に京町屋

PDF= 俳誌の salon

春鹿

北尾　章郎

年忘の時宜のお開き若女将
飲み屋街聖樹ちんまり立つ今宵
会津訪ふ旧藩校の弓始
幼馴染みに出遇ふうぶすなお元日
成人式母似父似の顔揃ふ
絶品の牡蠣粗々し白磁皿
春鹿の群を奔らすホルンの音

雪をんな

阪本　哲弘

五輪目指す自主トレ開始息白く
風邪の神学級閉鎖企みぬ
やはらかきナースの声や鬼やらひ
甲冑をでんと据ゑたる雪の宿
朝市や雪諸共に棹秤
宿帳に滲む筆跡雪をんな
盗難の仏杳とし山眠る

六つの花

宮崎左智子

一番鶏のきんと張る声寒の入り
十字路に咲く水仙の誇らしげ
狸寝入りの猫喃々と炬燵守る
裸木に魂甦る六つの花
如月の空や伽藍の屋根光り
春隣光集めて爪アート
稲荷山また時雨るるや一の午

冬牡丹

伊東　和子

下萌ゆる嵯峨野あるきの一万歩
冬牡丹ほぐれ合掌心より
菰被る妓王のさまに冬牡丹
ひらがなでだんご売る店日脚伸ぶ
白椿落つる寺苑の思惟仏
丸窓の透けたる庵かぜ屏風
冬牡丹丈一尺を己が色

PDF= 俳誌の salon

べつこう色

杉本　綾

大根をべつこう色に煮てひとり
桟橋にわかさぎ釣の寡黙かな
風花や湯屋の帰りの胸に溶け
七日粥に庭の一種加へける
白粥の塩のあまさや初音せる
新年や傘寿の吾に買ふピンク
初鏡すこし微笑む母に似て

春立つ

坂上　香菜

筒咲きにつましく開く冬椿
日脚伸ぶ素振りをしつつゴルフ談
荘厳な鷲の襖絵梅匂ふ
虹色に首光らせて春の鳩
春霧の立つ杉山や鯖の道
間伐の杉ころがれる雪解川
芽吹風お江の巨大供養塔

ロボット歩き

森下　康子

春遅々と出番待ちぬる車椅子
巻寿司の残り香満ちて寒明くる
厚着してロボット歩き園児たち
雪深とサスペンスめく街となり
シャッターチャンスにダイヤモンド冨士寒夕焼
春色の流行りルージュや星いくつ
春陽さす一等席は猫のもの

雛飾る

竹内　悦子

寒満月玻璃に貼りつく気配して
雪をんな雪ある山へ帰りけり
冬萌や買ひ手決まらぬ売却地
雛飾る大人ばかりが嬉々として
よく寝る嬰男雛女雛に見守られ
重くなる嬰を抱きて春を待つ
凍つる夜の白湯はすぐ冷め飲む薬

PDF= 俳誌の salon

托鉢僧　粟倉昌子

臘梅や黄檗山の托鉢僧
朝の道寒行僧を追うて布施
家と共に生くる藤の樹寒肥し
川涸れて舟はシートに眠りけり
昼火事にしばし歯科医は手を止めて
鯛焼の鳴門ブランド大看板
日脚伸び電車ひと駅乗り過す

春告草　飯田美千子

炮烙に願ひを乗せる追儺かな
待ちわぶる春告草の香る日々
善哉を振舞はれけり初午祭
料亭へブランド花菜出荷せる
雛飾る街道筋の京町家
バス降りて急ぐ家路や春の雪
ふる里のガイド研修春寒し

盆梅　石川かおり

雪嶺や鳶点点と右廻り
犬褒めて盆梅褒めて立ち話
節分や天の岩戸てふ潜り（日向大神宮）
初午やみな右向きの焼すずめ
沿道の声援を背や息白く
見下ろせる寒林越しの大鳥居
雪原や鹿の睡毛も真白に

寒雀　井口　淳子

あかときの雪の伊吹嶺こがね色
冨士山の広がる裾野寒雀
寒晴に物選りゐる干物沼津港
鈍行の旅又楽し着ぶくれて
職決まると子よりメールや日脚伸び
朝搾りの酒で寿ぐ春立つ日
ソチ五輪輝け熱き梅二月

PDF= 俳誌の salon

青き地球

伊藤　憲子

柚子風呂や白寿の友の白き肌
風呂吹きや六腑にしみるおもてなし
葉牡丹の渦の探険多彩なる
梅かたし積んどく俳誌動きけり
銀世界に笑みほころばす実南天
青き地球永遠にと祈る春の月
秘密法に怒り爆発寒風裡

寒　晴

大松　一枝

今まさに窓一杯の冬落暉
たくましき漢瓦師寒風裡
やるせなき思ひの霜夜「大地の子」
訪ひ来しが声なく去れり寒雀
その青に魂奪はるる寒の晴
手放せぬ齢や電気膝毛布
未だまだと命を愛しむ雪中花

寒　椿

岡久美子

豪商や榾火明りに立志伝
佗助の坪庭早も日暮れけり
庭望む波打ちガラス寒椿
室町や吾妻コートのモダン柄
冬日さす螺鈿机の贅極め
泊つる船も枯色となる冬の浦
新婚の庭に一茎水仙花

寒日和

木戸宏子

挨拶を交はすもはてなマスク顔
カラフルなヘリ飛ぶ寒の空真青
寒晴やエイト川面を滑り行き
振袖の慣れぬ足取り成人日
ナポレオンの生涯はしょる初歌劇
冴ゆる堂龍の眼の険しさに
恵方巻ハーフサイズを注文す

PDF= 俳誌の salon

瑠璃集

氷瀑

黒住　康晴

氷瀑が天使の梯子閉ぢ込める
錐揉みのスノーボードや天を刺し
淡雪の睫毛を濡らす別れかな
蕗味噌の上をゆきかふ徳利かな
梅開き天神の鈴鳴りやまず

諸子釣

藤見佳楠子

春待つや日々特訓のあいうえお
風に乗り春の訪れ粟田口
新聞の入試解答冴え返る
日を返す比叡遥かに諸子釣
愛想よきおばさんの声蜆買ふ

をんな鷲

小澤　菜美

駅長の実直鷲のニュース貼り
南限の琵琶湖を好むをんな鷲
味めぐりの琵琶湖八珍水温み
山の田へ小白鳥来よと湖北人
白鳥の水掻く音や朝の靄

春隣

常田　希望

体内に海を思へり春隣
淡雪や天ほつれたるところから
余りたるものと思へぬ余寒かな
白梅の下に農夫の憩ひけり
眠る間は心美し春の闇

6Bの鉛筆

松岡　和子

大根の豊作不作峪隔て
夕五時の「夕焼け小焼け」日脚伸ぶ
萌黄なる近江上布の絆雛
昼読書風邪を免罪符と致し
6Bの鉛筆で描く冬の峡

PDF= 俳誌の salon

四月号月評

塩路　隆子

屋根よりの落雪響く朝の床　　笠井　清佑

二月十三日から降り続いた雪は十四日になっても降り止まず、奈良地方は二十年振りの大雪に見舞われた。十四日の朝のことであろう。しずり雪どころの騒ぎではない。朝の床で聞かれた「落雪」の轟きは安眠を貪る作者を驚かせたのであろう。

木偶戎めでたき春を独り舞　　山口キミコ

淡路の水仙を見に行かれた時の作品。筆者が水仙峡を訪れたときは館のなかに飾りつけてある木偶を見ただけであったが、お正月にはめでたく独り舞を舞っていたようである。素朴な淡路木偶の舞が目に浮かぶ。

天空に骨身をさらす冬木立　　田中　浅子

安定した実力をお持ちの作者である。冬木立を擬人法で捉えられた作品である。「骨身をさらす」の措辞が新しい。晴天に枝を伸ばした木々はまるで裸同然。しかしすこしずつ春は近づいている。

春鹿の群を奔らすホルンの音　　北尾　章郎

鹿寄せのホルンの音を聞きながら、飛火野を駈ける鹿の群れる姿が見える。「ホルンの音」と言い「春鹿の群」と言い飛火野に春の訪れを感じるものが、一句に漲っているワンシーンのシャターチャンスの良さを褒めたい一句である。

宿帳に滲む筆跡雪をんな　　阪本　哲弘

この句が句会に出たとき「阪本さんの句」と言った人がいた。「雪をんな」を詠ませると実力発揮の阪本さんである。雪女という架空の人物に、あれこれと脚色をする楽しみを味わっておられる作者である。今回の出来も上々である。もう一つ「菊人形」の句も作者の専売特許。楽しい良い句が沢山ある。

稲荷山また時雨るるや一の午　　宮崎左智子

足を痛められた作者は家の中の生活が多い。隔月のエッセイも違えず投稿いただいている。したがって身ほとり句が多い。この句も伏見の宮崎邸から稲荷山を眺めての作品。「一の午」に「またお稲荷さんが時雨ている」との独り言が聞こえるような作品である。（以下略）

PDF= 俳誌の salon